

メンガーの講義録

八 木 紀一郎

カール・メンガー関係の資料については、この年報の前号で岡崎義富氏が、備忘録風の整理をされている。私もこの数年メンガー文庫を利用しながらメンガー研究を続ける中でいくつかの発見はしてきたものの、系統だった調査報告ができる状態にはまだ達していない。したがって、この機会では、最近その存在と内容を確認することのできた、メンガー（およびベーム-バヴェルク）の講義録を対象をしぼって資料紹介をおこなうことにしたい。

* その一部は近刊『メンガー 一般理論経済学』（『経済学原理』第2版の邦訳 みすず書房）の訳者解説に述べる。また『岡山大学経済学会雑誌』第13巻1号「Menger on Ricardo」は、リカード『原理』へのメンガーの書きこみの解説である。

問題の講義録というのは、岡山大学附属図書館所蔵黒正文庫中の三点とウィーン大学図書館に保存されていた四点、計七点である。岡山大学のものは黒正厳博士（1895—1949 京大教授・経済史・農業経済専攻）が欧州留学（1922—25）の際に購入したものと推定されるが、著者名も制作者・制作年も入っていない未製本のプリントである。メンガーおよびベーム-バヴェルクの名は、このプリントを包んであった紙に手書きで記されていた。私は、このプリントの存在を、昨秋（1980年秋）旧六高校長であった黒正氏の記念事業の手伝いをしている時に関係者から知らさ

れたのであるが、岡山大学図書館はこの資料の展示を過去におこなったことがある。ヴィーン大学の方は、黒正文庫でのプリント発見後に、照会をおこない複写を入手したものである。ただし、目録に記載されているが、戦災によって失われたものがさらに一点あったとのことであった。ともあれ、その標題等を以下に記す。

- ① 黒正文庫Kr 330.1 M1618 [Carl Menger] *Nationalökonomie*, 448 Seiten, ただし, S. 449以降欠, 21cm×34cm
- ② 同上1617 [Böhm-Bawerk] *National Oekonomie*, 52 Bogen 412 Seiten ただしSS. 3-6, 249-56は欠けている, 16cm×25cm
- ③ 同上1616 [Carl Menger] *Repetitorium der Nationalökonomie*, 15 Bogen 120 Seiten, 16cm×25cm

以下のヴィーン大学の資料については、同大図書館蔵書目録の記載を転記し、それに [] によって、追加およびコメントをほどこす。

- ④ III 365.652 Carl Menger, *Nationalökonomie*, s. l. [発行地記載なし] c. 1890 [この成立年代には疑問がある。少くとも1893年以降] [452 Seiten, 21cm×34cm]
- ⑤ III 398.505 Carl Menger, *Finanzwissenschaft* [標題は *Finanz-Wissenschaft von Prof. Carl Menger*], s. l. (Vorlesungsschrift.) c. 1888 [115 Seiten の本文にメモ(手書き)と目次が付されている。21cm×34cm]
- ⑥ III 365.653 Carl Menger, *Finanzwissenschaft*, s. l. 1890 [184 Seiten, 21cm×34cm]
- ⑦ II 580.441 Carl Menger, *Finanzwissenschaft*, (Vorles.) s. l. 1890 [256 Seiten, 21cm×34cm]
- ⑧ III 398.506 Carl Menger, *Nationalökonomie* (Skripten), s. l. c. 1888 [戦災によって喪失]

以上⑧を除き7点の資料の内、①と④、⑥と⑦は、内容に関してはほとんど同一である。書体は、②と③が現代風に近く、それ以外は古風な **Fraktur** の筆記体に近い。④と⑤は、おそらくメンガー自身の講義の準備に用いられたものと思われ、随所に書きこみがみられる。すでに述べたように、これらの資料の本文自体には、著者名も〔例外は⑤〕、刊行に関連した事項もふくまれていないのであるが、④と⑥には、冒頭ページに *gesch. Amaneunsis Lorenz 09* という書きこみがあり、また⑤の冒頭ページには *Oct. 1888* と読めそうな鉛筆(?)の書きこみが、さらに④の最終ページには、*31.I.98* と読めそうな数字の記入がある。

E.カウダー氏の筆者への御教示によれば、これらはオーストリアの大学に特有な **Skripten** とよばれる講義録で、書店が講義室に書記を送りこみ講義を筆記させ、それを石版印刷で刊行したものだ、ということであった。とすれば、④の冒頭ページと最終ページの書きこみは、筆記者名とメンガーの講義あるいは校閲終了日を示すものかもしれない。①④の講義録の中程の部分では1892年が「現在」とされ、また文献案内や「付論」では1893年までの記載があるので、この講義はこの頃におこなわれたと見てよいであろう。

⑤⑥⑦の成立年代については、ヴィーン大学の目録の記載を信用してよいであろう。つまり、1888年の⑤が拡充されて⑥⑦になったのであろう。このプリントについては、ハイエクが「彼の財政学講義のプリントは、引退の20年後でも、なお受験用の最上の教材として求められていた」と述べたことがある。(Carl Menger *Gesammelte Werke*, hrsg. v. Hayek, Bd. I, 1968 S. XXXIV)

資料②③については、ヴィーン大学の目録にも対応するものが見当たらない。この二つでは〔:〕を用いて補足が加えられている。また資料中の最新の叙述は、②では1902年、③では1894年であ

る。ベームがアカデミズムに復帰したのは1904年であるので、この1902年というのは適合的であり、また内容からいっても、ベームの講義録であることは疑えない。③は「復習書」となるように、きわめて項目羅列的であり、メンガー自身の講義に直接由来するものかどうか、については疑問が残る。

次にこれらの資料の内容であるが、紙幅も限定されているので、構成を簡約化して示すにとどめざるをえない。

①④〔第一部序論〕(人間の経済・国民経済, 経済諸学概観, 社会政策・社会主義との関係, 方法について: 以上前おき, 以降, 経済学の歴史と発展)

「第二部」は「理論的国民経済学の叙述」と題され、欲望, 財, 財の種類, 所持財, 資産, 価値, 価格, 貨幣と40S.ほどの順をおった叙述がなされたあと、通貨・信用制度の叙述を含む貨幣論が延々とつづく。次に、第三部とされるのかどうか不明であるが、各論的な「所得の理論」がくる。地代, 労賃, 資本利子, 企業利潤と論じられるが、理論的な叙述は、制度的な叙述の中には含まれている。最後に、労働問題や協同組合についての「付論」がある。

② 序論(1. 人間の経済 2. 国民経済 3. 国民経済学の特質と歴史) 第一部 経済の基礎(1. 欲望 2. 財 3. 財の価値 4. 資産) 第二部 財の生産(1. 生産要素 2. 生産組織 3. 経済性原則の影響下での生産の態容) 第三部 経済的交易(1. 価格 2. 貨幣 3. 信用) 第四部 財の分配(1. 分配過程一般 2. 地代 3. 労賃 4. 資本利子 5. 企業利潤 6. 分配過程の結果) 第五部 財の消費(1. 消費一般 2. 生産と消費の関連 3. 恐慌 4. 経済と人口)

③ 総数73にわたる項目が標題なしの四部にわけて並べられている。各部にあえて標題をつけるとすれば、Ⅰ. 経済の制度 Ⅱ. 交換経済 Ⅲ. 経済政策 Ⅳ. 労働問題 ということになるであろうか。

⑤⑥⑦ 目次のあるのは⑤だけだが、構成はほぼ同じである。

序論(財政学の歴史他) 財政学の叙述(経済の諸原理/国家経済と民間経済の相異)

A 予算論 B 国家の収入の体系

国家の経済的収入 Ⅰ. 私経済的収入 Ⅱ. 国家の経済的収入 a Regalien 王侯特権・特許収入権 b Gebüren 手数料 c Steuern 租税〔このa, b, cについての詳述が半分以上のページをしめるが、その内容は当時のハプスブルク帝国の実状に相応したものである。〕

これらの資料の利用にあたっては、Skriptenはその成立の仕方からして、一般に信頼性の高い資料ではない、ということに留意しなければならない。これは、カウダー氏の私へのアドバイスであった。しかし、それを考慮に入れるとしても、これらの資料は、オーストリア学派の創始者達のもとで、どのような経済学教育がおこなわれていたかを物語る唯一のまとまった資料である。広範な領域にわたり、制度論を多くふくんだこれらの資料は、たしかに理論的な深さや新しさには乏しいにせよ、かえってそのために、これまで抽象的理論的視角から論じられることの多かったこの学派を、当時の社会状況やハプスブルク帝国の国家機構の中にひきもどして考察することを可能にするものであろう。また、①④が『原理』以後のメンガーの思索を探究しようとするものにとっての重要資料であることは、あらためて記すまでもない。

(岡山大学経済学部助教授)